

【大学等・一般の部】 優秀賞

曼珠沙華の道

大分市 朝日 容子



『春を愛する人は 心清き人 スミレの花のような 僕の友達』(夏・秋・冬と続く)

私の参加する読書会では、月に一冊課題の文学書を読み感想を話し合う。会の始めに季節にふさわしい歌を全員で歌う。七月は荒木とよひさ作詞、作曲『四季の歌』。

私は芹洋子の澄んだ歌声が好きで若い頃、よく口ずさんだ。74歳になった今、改めて歌うと遠い日の情景が懐かしく蘇ってきた。

学生時代を終えた私は古里へ戻り、父と同じ町内で教職に就いた。仕事が済むと、いつものバス停で父と待ち合わせる。20分程揺られて村のバス停に着くと、家へと続く田舎道をのんびりと歩く。

陽は西の空に傾き、村は茜色に包まれている。心地よい風の中、夕映えの二人の顔は、ほんのりと紅に染まる。遠くに農作業を終えた人がゆっくりと腰を伸ばし、家路を急ぐ。

稲の花の畔道は曼珠沙華が暮色を集め、真赤に燃える。父はでこぼこ道を歩きながら時に俳句を詠んだ。

(曼珠沙華 蕾合掌 緋を包み)

「どうだ。これは……」

父は如何にも自信有りげに言う。

私は五・七・五と指を折る。

「うん。いいね」と答えると父は満更でもない顔をして笑った。

私の通った小学校の前を過ぎると、地区の共同墓地が見えてくる。独り、終バスで帰宅する時、暗闇にぼんやりとかすんだ墓石に脅えて急ぎ足になった。

そんな話をすると父はハハハッと笑った。

「人間は死んだら、みんな自然に戻るんじゃ。なあんも怖くはねえぞ。美しいことなんだ」

田んぼ道を抜けると我が家の明かりが見えてくる。季節の移ろう中、何度この道を往来したであろう。

26歳の春、私は嫁いだ。嫁ぐ朝、目が覚めると私の机に一輪の桃の花。父だ。咄嗟に思った。

今日からは、もうあの道を共に歩くこともないのだと別離のたとえようのない寂しさが襲ってきた。

ときが流れ、父が定年退職をして一年目。

その日は突然やってきた。

「父ちゃんが死んだ!」

電話口から聞こえる母の悲痛な声。

この二日前、豊後大野に住む両親は大分市の私の家へ遊びに来ていた。孫を膝に乗せ、昔話をしながらお酒を嗜む。父の至福のひとつときだと私は分かっていた。上機嫌の父は、おもむろに一冊の本を食卓に置いた。表題は『花無心』。

「花無心でなんね?」私はページをめくりながら訊いた。

「まあ、読んでみりゃ分かるよ」父は穏やかな笑みを浮かべる。

俳句や詩、随想など認められ、傍らには父自らが描いた露草、曼珠沙華、茶の花など、四季の草花が淡い色調で添えられている。

「お父さん、こんなにいつ描いたん?」

「あー、田舎道を歩きながらぼつぼつな」

私は夕食の支度にかかった。

「お父さん、何がいい?好きなもん作るわ」

「なんでもいいよ。それよりなあ、今晚泊まってもいいかなあ」父は遠慮がちに言う。

「ダメで! 明日用事があるんで」と母。

父は拍子抜けした顔で「ああ、分かった…」

「お父さん、またゆっくり泊まりに来りゃいいよ。そんなときまで『花無心』読んどくから」

私は、さり気なく促した。

「ああ、それからのう、この本書いたんでもう、なあんも心残りはねえよ」

冗談ぼく笑い、優しいまなざしを向けた。

「おじいちゃん、また来てね!」

「おう、おう」

父にまといつく孫二人の頭をいとしげに何回も何回も撫でた。

翌翌日、父は病を得て61歳で不帰の客となった。

茶の花が淡く咲く初冬であった。

『旧道の 見えて懐かし 秋の山』